二人の一人旅

麻婆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人の一人旅

【Ｎコード】
Ｎ３９５４Ｖ

【作者名】
麻婆

【あらすじ】
夜。悶々と過ごす一人の少年は、誰かに話しかけられる。それが、二人の出会いであり、二人の一人旅の始まりであった。

【ちょい読み連載】１話２０００文字前後を目安に連載します。

1．プロローグ　～　心の入り口

人の心とは実に面妖なものです。整合性など塵ほどであり、統一性など芥のようなものです。心象世界の理屈は、相手は勿論のこと、ときに自分自身をも困惑させてしまうもの。確かに掴んだと思った感情の感触も、瞬きの間に消え失せてさも元から無かったかのような白々しさ。

そもそも人の心とは実態が無いのでありましょう。脳の生理現象だとかそういう類の話ではありません。いや、つまりはそういう話なのかも知れませんが、ここで言う『実態がない』とは『実態があるものに心は干渉できない』という話なのです。

しかし、そんな実態のない心でも動かせるものが一つだけあります。それは自分自身です。心が動かすのは自分であり、心を動かすのはその行動であります。

ご理解いただけたでしょうか？

「まあ、なんとなく……」

それは幸先のよい滑り出しです。それでは、より一層の理解を求めて出立いたしましょう。

「ちょ、ちょっと待て！　行くって何処に？　そ……そもそもお前は誰だ？　なんだ？」

先ほど説明した事柄をすっかりお忘れですか？　しいて言えばわたくしは『思考』でありましょう。貴方様の思考です。こういった口調なのも、貴方様の好みなのでしょう。汚らしい部屋の隅に置いてある黄ばんだ本棚。そこにある漫画本に、似たような口調の女性が出てきます。貴方様は幾度も同じページを開い――

「うるさい。うるさいよ。分かったから。いや、分からんけど分かったから。もうやめて」

頬を朱に染めて羞恥に身を焦がして悦ばれているところ申しわけありませんが、そろそろ出立いたしましょう。夜が明けてしまいま

す。
「うるさい。すごいうるさい。余計なこと言わないでくれるか？」
あらあら。
ますます真っ赤になられてしまって。そのまま気をやってしまってはいけませんよ。冷静になられてはわたくしが消えてしまいます。
「こいつ殴りたい……」
はて？　それはまた面妖な……。
「も、もういい！　もうなんでもいいから！　……ったく、何処に行くって？」
貴方様の心の中です。心象世界をご覧にいれましょう。貴方様が理解できないと嘆いていたことも、恐らくそうすることで理解できましょう。
「……。つまりお前は、悩み疲れた俺の幻聴ということでいいか？」
大きく間違ってはいません……て――もし？　どうしていきなり眠ろうとするのですか？　これから出立だと――
「あー疲れた。寝よ寝よ」
……。貴方様が友達だと思っていた女性に好意を告げられ、戸惑った挙句に答えを保留し、悶々と夜まで過ごして堪えきれずに卑猥な活動写真に手をかけた理由を、知りたくはないのですか？
「ありがとう！　丁寧な説明を超ありがとう！」
いえ、それほど感謝されることでもありません……。
「なに最後の沈黙？　ちょっと得意げな雰囲気がびしびし伝わってくるけど？！」
わたくしは貴方様の嗜好に合わせて創られました。貴方様自身で創った貴方様自身です。証拠に、貴方様はやはり慇懃無礼な態度をとられて悦んでいらっしゃいます。手に取るように理解できます。
「俺すごい頭おかしい奴じゃん！　なに自分で自分創ってんの？！
しかもドMとか……俺、気持ち悪いな」
はい。おっしゃるとおりです。

「こい……つ……！！」
嬉しそうでなによりです。歪みありませんね（笑）
「おい！　いまちょっと笑ったよな！？」
はい。
そのような些事は脇に放り、そろそろ出立いたしましょう。貴方様が悩んでいる――『あの女性は、自分にとって友達なのか、はたまた恋の対象であったのか』という問題の答えを求めて。
「あ、うん……。わかった、わかったよ。なんかもう色々ひどいな俺……」

☆

そうして、ラヴィという名の妄想たくましい少年は、自らが創り出した心象の案内人と共に、よく知ったまだ見ぬ世界へと旅立つ。

――　次話へつづく　――

1．プロローグ　～　心の入り口（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

次話以降もちょっとした空き時間のお供に、よろしくお願いいたします。

2. 海が降る世界

ラヴィは白い霧に覆われている視界に気付いた。いつの間にやら見慣れたヒバ材の部屋はどこにもなく、濃い霧に視界を奪われ、呼吸をするたびに青臭い草原の匂いが、むせ返るほど濃く鼻孔を抜けていく。

その匂いに、足元は鬱蒼とした草花で埋め尽くされているのだろうとラヴィは思った。しかし、麻でできた涼しげな寝巻きの足首を撫でる感触は、植物のそれではない。細くて柔らかい毛が敷き詰められている。辺りの霧へ目を凝らすと、その毛はラヴィの身長ほども高く長く伸びていることに気が付く。

ラヴィは言葉もなく立ち尽くしていた。

自分が生まれ育った、あの多国籍な国。王様と民がいるのだから国であろうが、方々の国々の文化を積極的に取り、受け入れ、人種と文化の坩堝の中で好きな色に染まることができる。それを国と言うことに抵抗を覚える者は少なくない。しかし、それでも成り立ってゆけるのは、単衣(ひとえ)に政(まつりごと)を行う上層部の才覚ゆえだろう。

そんな異聞が割拠する国でも、草は草の匂いであり、鋭利でしなやかである。これほど生物のような温かさの上に伸びる毛が、どうしてこうも濃い草の匂いを放つであろうか。

ラヴィはどうしたものか、どこから考えてよいのか、目の前の霧のように頭が真っ白になっていた。

「あ……あぁ。あ、声は、出る、のか」

ラヴィが音声を発したその瞬間、前方の毛の草原が大きく隆起した。

「うあ――ッ」

満足に声も出せぬまま、ラヴィは天地左右前後の感覚を失い、何かしらの力に翻弄された。辛うじて長い毛束にしがみつき、体中をしたたかに打ちつけながらも意識は保っていた。

方向感覚が戻り、自分は上方に移動していると分かった。白い霧がまるで石つぶてのようにばちばちと顔を打つ。いつまでこれが続くのか、とラヴィが恐怖に駆られた時には、既に白い霧は晴れ、上昇の勢いは途絶えて浮遊感に変わっていた。

「……」

ラヴィは息を呑んだ。

眼前の景色に。

いや、見渡す全ての景色に。

掴まっている長い毛が風によって流れ、ラヴィの視界いっぱいに不可思議が広がった。

空には海があった。海の中にはゆらゆらとした夕日が見える。オレンジ色の飛沫を立てながら、波は大きな山に寄せては返す。山は上半分だけが海に浸かっていて、下方は中空に浮いている。山に砕けた波は、たまに雨となって降り注いだ。空へ向けて。

眼下に広がる紺碧の空は、どこまでも続いているように見える。ラヴィが突き抜けた白い霧は雲だったようだ。雲にぽっかり開いた穴から巨大な浮島がうかがい知れた。浮島は全体的に球を描くように、大小さまざまな形で無数に点在している。その球状のちょうど真ん中、太陽と思しき球体が存在した。

太陽は黄や赤、紫や青、緑や灰、他にも言葉では表せないようなグラデーションを形成して、次々にその色を変えている。しかし、その光はラヴィの目にはちかちかと痛いほどの刺激を与えるが、周囲の浮島や雲には反射していないようだった。

この世のものとは思えぬ風景に呆然としていると、どこからかプロペラ音が聞こえてきた。母国を狙う空襲だろうかと、一瞬身をすくめたが、そもそもここは自分の知っている国――場所ではない、とラヴィは青臭い毛の草原から顔を上げた。

プロペラ音を轟かせ、上方の海を突き破って現れたのは、スペードが先か、その魚が先か、という形をした魚。エイである。目測で１０メートルはあろうかというヒレを広げたエイは、鼻先（？）で

プロペラを回して前進、ヒレを使って上昇と降下を行い、ラヴィに近づいてきた。背中にはコックピットらしき物が載っている。操縦が可能なのかも知れなかった。
「一体……これは、なんなんだ？　俺、なんで……」
「にゃー！！」
「え？！　なに！？」
ラヴィの全身を震わす大音声が響いた。それはラヴィの足元、毛の草原から直接振動を伴って耳朶を叩いた。可愛らしい声質には不釣合いなあまりの大音量に、エイのプロペラ機もバランスを崩していた。
恐る恐る、ラヴィは自分がしがみついている毛の草原を掻き分け、声の発生源と思われるほうへ這い進んだ。雲から抜けたことにより、毛の色は灰と黒であることが確認できた。トラ柄を想像したラヴィは、まさかと思いつつ、柔らかい毛房をどけた。
「にゃ！！」
爆発を思わせる音声が、物理的衝撃を以ってしてラヴィを強襲した。うまく毛束を掴めず、手を振り回しながらラヴィは後方にすっ飛んだ。ごろりごろりと面白いほど転がりながら、ラヴィは負けじと大声で叫んだ。
「猫だーーーーッ！　でっっっかい猫だーーーーッ！！」
「貴方様もよい乗り物を見つけられましたね」
ようやく掴んだ毛束を強く握り、仰向けに倒れていたラヴィに、エイに乗った人物が語りかけてきた。オレンジの逆光で見えにくかったが、ラヴィにはそれが誰だか分かっていた。部屋で悶々としていた自分に話しかけてきた、自分が創り出した自分自身。好意を告げた彼女によく似た声色の、慇懃無礼なあいつだ。
エイはゆっくりと巨大な猫に寄り添い、ラヴィの視線に並んだ。
「え？」
慇懃無礼なそいつは、彼女にそっくりだった。ラヴィに好意を寄せた、リンシーという名の少女に。

「はて？　わたくしはまだ罵倒していませんのに、もう顔が赤くなっていらっしゃる」
そう言って、リンシーみたいな彼女は、リンシーみたいな悪戯っぽい笑顔を浮かべた。
ラヴィは、とりあえず、自分の頭を抱えて、自分の頭が、とんでもないことになっている、ということだけ認識した。
そんなラヴィの後方にある浮島の一つから、とてつもない巨木が天の海に向けてそびえ立った。巨木の枝房が海に突き刺さり、盛大な飛沫が雨となって極彩色の太陽に降り注いだ。
「あらあら」
そんな様子を呆れつつも可笑しそうに眺めている少女。この案内人と共に、ラヴィの心象世界での旅が始まった。

――　次話へつづく　――

2．海が降る世界（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。
２話目にして２０００文字を少々超えてしまいました（汗

まだ何が何やらよく分からないと思います。これからオブジェの意味などがなんとなく理解できるようにしていくつもりです。

次話以降も、ちょっとした空き時間にでもよろしくお願いいたします。

3．甘美の園

意気天を衝く、巨大な木。曲がる事を知らぬように、真っ直ぐに、ひたすら真っ直ぐに上方の海へと突き刺さっていた。幹は血管のようにうねる無数の幹の集合体である。枝葉は最上部にしか見当たらない。

その巨木によって砕けた飛沫は、空に降り注いだ。唖然とするラヴィに、その下で案内人を睨みつける大猫に、全てを知っているように微笑む案内人に、でらでらと禍々しく赫耀（かくやく）する太陽に、砕けた海の飛沫は降り注いだ。その飛沫は熱を有していた。

「あっちッ！！」

ぴりりと肌を焼く紫外線にも似た熱さで、ラヴィは思わず声を上げた。大猫も熱かったのか、大音声を発して身悶えた。ラヴィは振り落とされないようにその毛束にしがみつくのだった。

熱い潮の飛沫をひらりひらりと避けているのはエイに乗る彼女だけだ。まるで踊っているようだと、ラヴィは少し見惚れた。が、自分の妄創したものだと思い出してげんなりとした。

「お前、どうしてリンシーの姿をしている？　そうだ、そもそも声だってリンシーに似ていた」

心象の案内人は、勝気で大きな瞳を猫みたいに細め、桜色をした厚めの唇を片方だけ吊り上げた。それはラヴィの知るリンシーそのものだった。唯一違うとすれば、案内人は赤い和服をまとっていた。ラヴィの祖母が生まれ育ったという国の着物であった。

「わたくしは貴方様に創造された仮の人格。貴方様自身でもあるのです。自分の胸にお聞きになられては如何でしょうか？」

もう一つ、リンシーはこのような口調ではない。これは確かにラヴィが好む漫画のヒロインの口調だった。リンシーはもっとあからさまに横柄な口調である。

「ぐ……。ま、まあいいや。で、ここが俺の心の中だということか

？」
「左様でございます。この世界は、ある意味でわたくしの庭。さて、どこから案内さしあげましょう」
そう言われてもどうしたものか、と周りを見回したラヴィは剣呑な視線を感じ、その方向へと目を向けた。大猫が、その巨体に似合わぬ愛らしい顔でラヴィを睨(ね)めつけていた。ヒゲがぴりぴりと振動している。
「な、なんだよ……」
たじろぐラヴィを庇うように、エイのプロペラ機がぶうんぶうんと鳴りながら移動した。コックピットの柔らかそうな扉が開き、案内人がラヴィを手招く。
「青臭い猫の背より、こちらのほうが乗り心地はよいと思います。わたくしも案内がしやすいというもの」
白くて細い指をラヴィの手に重ね、コックピットの隣を空けてくれる案内人。指だけでもこれほど柔らかく、卒倒しそうなほど甘いのなら、身体を密着させて座るなど、どれほど心地よいであろうか。ラヴィの背筋を、その悪寒にも似た誘惑が駆け上り、産毛が起立した。
あまりに無垢で暴力的な魅力。まだ年若いラヴィに抗う術はなく、きつく口を結んでエイのヒレに足をかけた。顔を真っ赤にしたラヴィの遥か下方で、浮島の一つが噴火した。小さな山が怒張し、浮島を侵食するように大きく大きく爆ぜた。空気を劈(つんざ)く轟音が耳を痺れさせる。
「くふふふ……。お元気ですね」
案内人は含み笑い、ラヴィをコックピットへと誘う。
しかしそれは成らなかった。
唐突に吹きつけた暴風が、エイのプロペラ機をたわませ、ラヴィを中空へと放り上げた。エイのプロペラ機はたまらず錐揉(きりも)みながら、海に半分浸った山へと突っ込んでゆく。
「わ！　うわ！　うわぁ！」

海と空が逆転した世界でくるりくるりと回転するラヴィは、天地左右前後の感覚など彼方へ飛んでいった。ただ大猫の鳴き声だけが耳から入り、ラヴィの頭を占めてゆくだけだった。

――　次話へつづく　――

3．甘美の園（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございます。
次話は猫さんが頑張ります。

またちょっとした空き時間にでもよろしくお願いいたします。

4．大猫奮闘す

大猫の腕が一振りされ、それによって巻き起こった暴風。錐揉み状態で吹き飛んだプロペラ機と、目を白黒させているラヴィを見つめて、大猫は慌てたように「にゃーにゃー」と腕を振り回す。

それが更なる暴風を呼び、大猫の声が大気を震わせる。

「なあああぁあ！！」

ラヴィは耳を押さえ、大猫の周りを羽のように捉えどころなく浮き、沈み、回転した。

「落ち着け！　猫！」

事態が飲み込めないなりに、この暴風が大猫によるものだと理解したラヴィは、大声で静止の言葉を叫んだ。その声が届いたのか否か、大猫はようやく動きを抑え、そっと落ちてくるラヴィを受け止めた。

ふさふさの毛の中に落ちたラヴィは、大きく息を吐き、自分の無事を確認した。

「俺、生きてる……」

雲の中からの急上昇、巨大な質量を持った音声の衝撃波、そして暴風と衝撃波の協奏曲。怪我一つないばかりか、あれだけ回転していながら酔いすらしない。そんな自分にラヴィは驚いた。しかし、ここが現実の世界とは違う、自分の心の中だと思えばそれも有り得るのか、と妙に納得したラヴィ。

「猫よ、どうしてお前は、あいつを吹っ飛ばした？」

大猫の手の甲に座り、その大きな瞳を覗き込んだラヴィは、不思議と安心感を覚えた。

「……」

大猫はなにか言おうとしたのか、口を動かしかけたが、喉がごろごろと鳴っただけだった。

「お？　声を出すと俺が飛ばされるから遠慮したのか？」

この大猫は、もしかしたら自分の心象内における外敵を排除する白血球のようなものなのかも知れない、とラヴィは思った。だが、そうなるとあの案内人は外敵ということになる。案内人はラヴィが作り出したもう一人のラヴィ。そうなると辻褄が合わない。ラヴィは癖のある栗毛をくしゃくしゃと掻き回した。

「にぃ……？」

心配そうに小さな声を出す大猫。どうやら声の調整を覚えたらしい。

考え込むラヴィの耳に、ぶうんぶうんとプロペラ音が聞こえてきた。案内人が繰るエイのプロペラ機である。

大猫の喉が鳴る。それは敵意を含んだ威嚇に変わった。突風が裂帛の叫びと共にプロペラ機を襲う。ラヴィは耳を押さえたが、大猫がうまく庇ったのか、ラヴィにはなんの痛手もなかった。

大猫の衝撃波と突風をなんなくかわし、エイのプロペラ機は悠々と泳いでいる。急速に上昇し、ラヴィと大猫を見下ろしたエイのヒレが、「くぱっ！」と間の抜けた音を出して前面が二つに裂けた。そこから大量のミサイルが怒涛のごとく発射された。

「なッ！　やべぇ！！」

思わず身を伏せたラヴィを、大猫は己の胸あたりに隠しこんだ。手と胸のふさふさした青臭い毛束の隙間から、ラヴィはその戦いを見守った。ラヴィにはそうすることしかできなかった。目の前の光景は、理解の及ぶ範囲を大幅に逸脱している。

大猫は凄まじい風斬り音を伴うミサイルを片手で必死に叩き落している。叩き落したはずのミサイルは踵を返してまた襲いくる。爆発などしない。それもそのはず、ミサイルはラヴィの知るミサイルではなく、どう見てもトビウオであった。トビウオは叩き飛ばされたのが海であろうと中空であろうと、その身をひるがえして初速全速で大猫に飛びかかる。

余裕綽々で大猫を見下ろすエイのプロペラ機、その背後。スピーカやアンプなどが突如として現れ、数と大きさを増していく。ふぉ

ーん、きぃーんなどとハウリングするそれらがピタリと、ラヴィと大猫を向く。大げさな咳払いの後、案内人の声が響き渡った。
「この世界では整合性や統一性など塵芥だと申したはず。ときには自分自身さえ困惑する世界。貴方様はすっかりお忘れですか？　三つ歩いただけで脳が味噌っかすに変わられるのですか？」
　そうだ。そうだ、とラヴィは思う。そもそも、案内人はラヴィ自身でもあると言っていたのは、案内人その人ではないか。あの道化師は何を企んでいるのだろう。あの外敵は。ラヴィはぎりり、と己の歯が音を立てたのを聞いた。

――　次話へつづく　――

4．大猫奮闘す（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございます。
不安を抱えたラヴィ。そして大猫と案内人。どうなることでしょう。

またちょっとした空き時間にでもよろしくお願いいたします。

5．リンシーと赤い林檎

リンシーはラヴィが大好きだった。しかしそう気付いたときには、無邪気に想いを告げることの出来ない年頃になっていた。

ラヴィと遊んでいると、ラヴィの級友が女子と遊ぶ彼をからかい、ラヴィは激怒してその場から立ち去る。リンシーは酷く悲しかったが、次の日には何食わぬ顔のラヴィがまたリンシーの隣にいる。悲しかったり嬉しかったり、でもリンシーは心にもない言葉で罵りながらラヴィを叩いた。ずっと小さい頃から、情けないラヴィを小突いたり蹴っ飛ばしたりした。口も手足も早いリンシーは、そんな自分に少なからず呆れていた。

軽く握ったリンシーの右手は、ラヴィの頭を小突くはずだった。昔のようにこつんと。だが、リンシーの拳が叩いたのはラヴィの肩だった。ラヴィはリンシーよりも背が高くなった。そんな事実に今更ながら驚いて、リンシーの心臓はお祭り太鼓さながらの威勢のよさで打ち鳴った。

しかして、リンシーは悶々とした気持ちをどうすることもなく、中等部、高等部と、ただただ積もらせていった。積もった想いは雪のようには消えず、いつまでも重なり続けてより鮮明さを増してゆく。

高等部になったリンシーは少しの手管（てくだ）を覚え、それとなくラヴィに気持ちを伝えようとした。しかしラヴィは寒天菓子みたいに歯ごたえがない。そのくせほんのり甘いのだからリンシーはどんどん腹が立ってきた。

「阿呆！！」

怒りのやり場に困ったリンシーは、唐突にラヴィを後ろから蹴りつけて走り去った。放課後のことである。いきなり蹴られたラヴィは、小馬のように跳ねるリンシーの結われた赤毛を、複雑な顔で見送った。

なんで怒っているのか、なんで悔しいのか、なんで泣いているのか、なんで蹴っちゃったのか。混乱を極めたリンシーは、とにかく全力で街中を走り回った。

悪魔は心の隙を温床に生まれるという。いつもは勝気な瞳から、涙を流れるに任せているリンシー。弱った心は隙だらけ。ならばそのとき聞こえた声は、まさしく悪魔の囁きであったのだろう。

「お嬢ちゃん。袖にでもされたかいな」

走るのにも疲れ、紫色の夕景のなかを足を引きずり歩いていたリンシーに、しわがれた老人の声が聞こえた。キレイなスーツを着込み、少し曲がった腰を支えるステッキは銀の装飾。黒い山高帽は、真っ白な髪とヒゲによく似合っていた。

「なによ」

リンシーは自分で思ったよりも険悪な声が出てきたことに驚いた。

「怖いのう怖いのう。ふぇふぇふぇ」

紳士風の老人は優しげな笑みでからかうように言った。

「あ、あたしは別に、フラれてなんか……」

「よいよい。ほれ、ここに座りなさい。爺さんが話を聴こうじゃないか」

萎んでゆくリンシーの声を優しく抱き上げるような老人の声。いつの間にかリンシーは、誰かに話せば解決するのかも知れないと、そういう心地になっていた。リンシーとラヴィを知らない、年も近くない、人生の先達(せんだつ)にならば、解決法も教えてもらえる、と。

「そら、林檎じゃ。甘いものでも食べればすぐハッピーじゃ。ま、ワシがそうなだけなんじゃがの」

ふぇふぇふぇ、と妙な笑い方で、老人は小奇麗な鞄から林檎を取り出した。

「うちで作った林檎じゃ、うまいぞ。食べながら話すといい」

真っ赤な林檎は、今にも甘く瑞々しい香りでリンシーの鼻腔を撫でそうだった。噛り付けば、赤い皮がつぷりと破け、蜜をたたえた果肉が歯に心地よく、甘い果汁が口腔に広がる。そんな様が容易に

想像できて、リンシーの喉が思わずごくりと鳴いた。
「ふぇふぇふぇ」
「む……」
老人はリンシーに睨まれても笑みを崩さず、話を急かすでもなく、暖かい毛布のようにリンシーと同じベンチに座っている。
「なんで林檎なのよ？」
リンシーはもしゃもしゃと林檎を咀嚼しながら老人に尋ねた。林檎は頭がしびれるほど甘くて、リンシーは少し怯んだ。
「うまいじゃろう？　特製じゃからの、ふぇふぇふぇ。――林檎は昔から知恵を授けてくれる果実と言われておる。お嬢ちゃんの悩みも、解決してくれるかものう」
「ふーん……」リンシーは噛むほどに甘くなる林檎に夢中だった。
「心を操作できればなあ……。んで、あたしがあいつの好きな漫画のヒロインに見えるようにするの。そうしたらきっと……」リンシーは夢見るように呟いた。
ふぇふぇふぇ、という例の笑い声にハッとなったリンシー。老人は立ち上がってリンシーを優しく見つめていた。リンシーは慌てて汁のついた口元を隠した。
「ワシが助言できることは一つじゃ。心を動かせるのは、心による行動、その結果だけじゃて」
そう言い残すと、老人は靴音を鳴らして立ち去る。リンシーは赤い林檎を握り締め、「ちょ、ちょっと待って爺さん！　あ、あ、ええと。林檎……美味しかった！」辛うじてそんなお礼を述べることしかできなかった。

その夜、ラヴィを呼び出したリンシーは、放課後のことを謝罪した。素直なリンシーに心底驚いた様子のラヴィ。素直ついでにするりと自分の気持ちを伝えたリンシーから、ラヴィは全速力で逃げ去った。

思ったよりも簡単に好きだと言えた。しかしそれは、終わりも存外に簡単だった。

独り立ち尽くしたリンシー。どうしてか口の中には、食べ終えたはずの林檎の味。甘く甘く、瑞々しく、後頭部をしびれさせ、喉を鳴かせる林檎の誘惑。抗うこともできず、そもそも抗う気もなく、リンシーの意識は薄れ、林檎へと重なっていった。

――　次話へつづく　――

5．リンシーと赤い林檎（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。
この小説は、あまり長引かせずに終わる予定です。

またお時間の空いている時にでもお越しください。

お気軽に感想などをいただければ幸せです。ツイッターアカウントを持っている方の読了宣言も歓迎です。

6．心象世界のオブジェ

大猫へ襲いくるトビウオのミサイル群が、唐突にその動きを止めた。周囲に静止し、のっぺりとした魚眼でラヴィと大猫を見つめている。ラヴィの全身には大猫のふーふーという荒い息づかいと、大太鼓を乱打したような鼓動の音が重く響いていた。大猫の体毛は所々ちぎれ飛んでる。

上空の案内人がラヴィたちを見下ろし、「これは失礼いたしました」と冷たい微笑みと共に、アンプで増幅された声を投げてよこす。案内人が何かを払うような仕草を見せると、トビウオたちはロケット花火さながらに海へと飛び帰っていく。

「わたくしとしたことが、ついつい侵入者にたいして排除行動をとってしまいました」

「侵入者……？」

ラヴィが思わず呟いたとき、下方の太陽がいっそう彩度を増し、混沌と脈打ち始めた。その極彩色の光に目を細めたのはラヴィと案内人だけであり、大猫の大きな瞳は海のオレンジを映すのみであった。

「なんだあの太陽は……」

案内人は静々とうなずき、エイのコックピットを操作した。

「それでは、案内人らしく少々説明をいたしましょう」

エイのプロペラ機はぶぅーんと勇ましい音で立体移動を行い、ラヴィと大猫へ近づいてきた。大猫はなおも反撃しようと思ったのか、喉が威嚇に鳴っている。

「猫、大丈夫だ。落ち着いて。何かあったらまた守ってくれ、頼りにしてる」

ラヴィはそう言うと、大猫の呆け顔をよじ登った。ちょうど鼻に手をかけたときに大猫が放ったくしゃみで、ラヴィとプロペラ機が体勢を崩したが、どうにか首のつけ根へ座ることに成功した。

「よし、教えてくれ」
大猫の眼前、ラヴィと大猫に肉声が届く距離で、案内人のエイが滞空していた。
「わかりました。あまり長々と説明してしまっては面白みがありませんので、手短にお話いたします」
「それは誰の面白みのことだ？」
ラヴィの訝しい視線を、リンシーとそっくりな案内人が笑顔で受け流す。ラヴィはその笑顔を知っている。いつも、大冒険が好きな考古学者みたいな笑い方をするリンシーの、滅多に見られない満面の笑顔だ。
突如、またしても巨木が浮島から伸びゆき、海へ頭を突っ込んでいる大きな山、その底辺へと衝突した。あまりの勢いに、山はさらに海へ深く潜ることとなった。しかも活火山だったらしく、海の中で噴煙を上げていた。
「な、なな……なんだよ……」
「まず、無数の浮島は、貴方様の理性と本能の両方を司っています。興奮状態になるなどして本能が理性を打ち負かしたとき、あのように巨木や火山などが出現します」
案内人は淡々と説明しながら、ちらりと着物の足元をひるがえして肌を見せる。遥か下方の浮島が三つほど粉微塵に弾け飛んだ。
「あらあら」
「ふーッ！！」
案内人の暴挙にラヴィは赤面し、大猫は威嚇の声を高らかにした。
「次に太陽ですが、あれは貴方様のこの心象における、貴方様の想いの核です」
ラヴィと大猫は、案内人の手のひらが向けられるがままに太陽へ視線を移動させた。ぎんぎらと極彩色に輝く太陽。やはりその色彩は周囲に反映していない。
「いまの太陽は本来の色ではありません。混乱している状態であるがゆえに、あのような極彩色になっており、周囲に溶け込めずに在

るのです」
「俺の……想いの核」
確かにラヴィは混乱していた。この現状に。しかし、案内人の言う混乱とは、そういうことではないのだろう。それはラヴィにも理解することができた。案内人が最初に現れたとき、ラヴィは大いに混乱していた。リンシーの告白と自分の気持ち、逃げ出したあとに出会った謎の紳士。あの林檎。
太陽がラヴィの想いの核ならば、色とりどりのフレアを上げている美しい様は、ラヴィの想いの美しさであるのだろうか。
「そして、最重要項目は――あの海です」
案内人は仰々しく天の海を指す。リンシーの姿をした案内人が、エイのプロペラ機に乗って現れたオレンジ色の海。心なしか波が大きくなっているようにラヴィは感じた。
「心象世界は一つではありません。想いの数だけ、一人の内に存在します。あの海は――この心象世界における、貴方様を占めるリンシー様の領域なのです」
「は？」
あんぐりと口を開けて海を仰ぎ見たラヴィ。
「じゃあ、この世界は……」
案内人の口角が片方だけ上がり、細められた目蓋の隙間から視線が流され、柔らかそうな桜色の唇から含み笑いが聞こえた。知らずラヴィの喉がごくりと鳴いた。
「貴方様の、リンシー様への想い――その世界です」
ラヴィは腹の底へ響く地鳴りを聞いていた。

――　次話へつづく　――

6．心象世界のオブジェ（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございます。
今回は少し説明くさいお話になってしまいました。

次話以降もちょっとした空き時間などのお供に、よろしくお願いいたします。

7．心象世界の番人

地鳴りが聞こえた。浮島のなかでも大き目の島が一つ、高速で回転を始め、海を目がけて跳ね上がってきた。

「ちょ！　おわぁ！！」

「にゃす！」

慌てたラヴィを庇うように大猫は身を返し、盾にならんと飛びくる島へ身をさらした。ラヴィは首もとの毛束にぶら下がり、必死の形相である。ラヴィの視線は島ではなく海へ向いている。

海では大波が幾重にもぶつかり合い、飛沫を上げながら糾(あざな)える縄のように一つになってゆく。そして、島の突進に合わせるがごとく、一本の海水の塊が海より出でる。

「猫！　上からも来た！　たぶん後ろに下がれば大丈夫だ！！」

轟く振動。海から飛び出た波で出来た大きな縄と、岩石や砂利の尾を引きながら跳び上がってきた巨大な浮島が、握手でもするように絡まった。しかし、握手と言うには質量や規模が違いすぎ、一大スペクタクルの様相を呈している。

後方に退いたものの、岩や大質量の飛沫がラヴィと大猫を襲う。やはり外敵を排除する白血球さながら、大猫はそれらからラヴィを守るため、次々と跳ね除けては身を挺して防いでくれる。

なにも出来ずにただ歯を食いしばるだけの自分と、颯爽と助けてくれる大猫。ラヴィは既視感を覚えた。情けない自分を叱咤しては颯爽とヒーローのように助けてくれたリンシー。その凛々しい横顔。でも本当は少し怖くて震えていた手。

ラヴィは誓ったはずだった。強くなるのだと、苛められたり馬鹿にされないように、いざというときリンシーを守れるようになるのだと。しかしそれは、時が経つにつれて風化していった。リンシーを守るのは俺でなくても別に構わないじゃないか、という免罪符を作り出して。

「あらあら、お元気ですね。これでは本格的に排除行動が起こりましょう……くふふふ」
相変わらず華麗な動きで回避行動を取るエイのプロペラ機、コックピットの屋根部分にまたしてもスピーカが出現し、案内人の声が鮮明にラヴィへと送られてくる。案内人の企み顔を見て、ラヴィは面白みの意味が分かった気がしていた。案内人はこうなるようにラヴィを焚きつけていたのだ。
海水の縄と浮島が完全に混ざり、濁流の嵐へと変貌していた。そこへ、小さな浮島群が次から次へと吸い込まれてゆき、海水も無尽蔵に増えてゆく。
「貴方様、頑張ってくださいまし。巻き込まれたら最期、心象世界は自分自身をも困惑させる。貴方様も無事では済まないでしょう」
もはや目視不可能になった案内人の声が、この轟音のなかでもきちんとラヴィの耳に入る。その暢気な声色に、ラヴィの怒りは全身へ浸透していった。
「くそッ……！」
あまりの目まぐるしい展開に、ラヴィは己の無力さを声にして吐き捨てる。大猫すらも動揺して動きが固まっていた。
「猫！　下だ！　一番デカイ浮島に降りよう！　太陽の裏側にあるやつ！！」
「にッ！」
大猫は短く返事らしきものをして、急速な降下動作を取った。ラヴィは毛束にしがみ付いていたので振り落とされることはなかったが、景色が歪むほどの速度と、後方から迫る岩石、そして進行方向から飛んでくる小さな浮島群、自分ではどうしようもないそれらに、生きた心地がまるでしなかった。
太陽を仰ぐ最大規模の浮島へたどり着いたときには、ラヴィも大猫も息たえだえであった。浮島といえど、周回するには数日を要すと思われる大きな地面へ足をつけた安心感。さらに、極彩色の太陽が飛礫（つぶて）などを防いでくれる頼もしさ。ラヴィと大猫はぐったりと横

になっていた。
「助かったなぁ……」
「にゃーす……」
そんな休息もつかの間、遥か前方の大地がめくれ上がり、五つほどの大岩が中空へ舞い上がった。
「えぇ！？　……こ、今度はなんだよ！」
大岩は極彩色の太陽を背に、岩とは思えない動きでそれぞれ形を変えていく。整ってゆく形に、ラヴィは懐かしさ覚えた。そうして五つの大岩があるべき所に収まり、合体した姿をラヴィは確信をもって指差した。
「『報道機兵隊　スクーパー』じゃねえか！　かっけえ！！」
在りし日の子供向けテレビ番組である。
「……」
大猫はスクーパーの合体機兵を見上げて声を失っている。その横で、ラヴィは場違いな歓声を上げたことを強烈に後悔していた。なにせ、その全長五十メートルに及ぶ巨兵がこう告げたのである。
『侵入者を認識。警告。十秒以内に退去せよ。否定する場合は強制的に排除する。十……九……八……』
「ホントかよ……」
ラヴィは観念したように膝をついたのだった。

――　次話へつづく　――

7．心象世界の番人（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございます。
特撮ロボット風の番人が登場しました。合体シーンをもっと濃密に書こうかと思いましたが、力の入れどころが違うので止めました。

次話以降もちょっとした空き時間などのお供に、よろしくお願いいたします。

8．戦え！合体報道機兵

『七……六……五…』

巨大機兵の排除行動カウントダウンは続く。一切の容赦も狂いもなく刻まれていく。数を数えるという単純な行為がこれほど恐ろしいのは、その後に待ち受ける破滅的な状況と、数える者の威容、そしてそれを砕け得ぬ己の脆弱さゆえであろう。ラヴィは脚が震えて動けない事実に気付いた。

『…四……三』

傍らに寄り添う大猫も茫然と機兵を見上げている。大猫の足元にいるラヴィには、その表情を窺うことはできない。機兵には劣るものの、大猫もラヴィからすると十分に巨大である。

「猫……」

『……二……』

小さく呟いたラヴィの声は大猫には届いていない。表情が見えずとも大猫は怯えている。それが容易に理解できる。ふるふると大きく身体を震わせ、うめき声にも似た恐怖の声をもらしている。

『一……』

ラヴィは大猫の怯えた姿など見たくなかった。理由は簡単なものである。自分を助けてくれた者の窮地など、誰が見たいものか。それだけではない、震える大猫と、あの日の震えるリンシーの手が、ラヴィには重なって見えた。許せるものではない、己を。脚の震えなど、知ったことではない。

『零……排除行動開始』

カウントダウンゼロと共に、機兵の胸元を覆っていた装甲が駆動音を響かせて開いた。そこには強大なカメラが据えられている。遠い国から伝わったという時間を絵に変える機械である。

そしてラヴィは知っている。報道機兵隊スクーパーの合体機兵――大スクープの必殺技を。

きぃぃぃと耳障りな音を放ち、大スクープのカメラが振動する。浮島の脈動を感じながら、ラヴィは大猫の前に立ちふさがる。小さな自分では盾にもなるまいが、心象世界の番人であるならば、主であるラヴィへの危害は基本的に行われないはずだ、という考えに基づいた行動。正に必殺技が繰り出される瞬間であった。

『ス・ト・ロ・ボ・ライィッッッ……ッ！！』

これまでの淡々とした口調からは想像できない絶叫を上げ、大スクープの胸部から光の柱が照射された。それは浮島の地面を焦がし砕き、岩石を跳ね上げながらラヴィへ迫った。正確には、侵入者であるところの大猫へ。

「にゃ……！！」

大猫は我に返るが、時は既に遅く致命的であった。

「――――ッ！！」

ラヴィは決して目をつむらなかった。歯を食いしばり、光の柱が止まってくれることを祈り、ひたすら機兵を睨み続けた。

果たしてその祈りはどこかに届いた。天地鳴動し、地面から巨大な樹木が天へ向かって突き立ち、海からは巨大な水柱が地へ向かって轟き落ちた。

巨木と海水がぶつかり、凄まじい水しぶきを立てた。それによって巨木を貫こうとした光の柱が減衰し、霧散した。

「や、やった！！　助か――」

ラヴィは予想以上の光景に、思わず拳を握って声を上げた。しかしそれは最後まで続かず、側面からの衝撃で地面をもんどりうって転がった。

「う……」

激痛に身をよじり見上げると、慌てふためく大猫がラヴィの視界に入った。どうやら大猫がラヴィを殴り飛ばしたようだった。軽く小突いたつもりが、大猫の力は小さなラヴィを虫けらのように転がしてしまったのだろう。

「お、お前……」

にゃーにゃーと慌てながらもラヴィを睨みつける大猫。その様子は、「あんたがバカなことするからでしょうが！このバカ！もやし！」と怒っているリンシーと容易に合致した。
ラヴィは確信するに至った。どういう訳だか知らないが、大猫の姿を借りたリンシーが、自分の心象世界にいるのだと。
『侵入者へ与（くみ）する主。それを主と認識せず。主を敵対分子と再認識。――排除行動を取らせていただきます……くふふふふ』
巨大機兵が突然、いままでの加工されたような音声からリンシーの声色に変わった。いや、口調からしてあの案内人の声であろう。
天高く渦巻いている濁流の嵐。そこへラヴィと大猫を守った巨木と海水が加わった。それだけでなく、大小かまわず浮島が飲み込まれ始め、天空の海がゆっくりと落ちてきた。
ラヴィと大猫が足を据えている浮島も、どんどんと地面がめくれ上がり、その体積を減らしてゆく。その轟音と嵐の中を、悠然と機兵が歩みを進めている。案内人に乗っ取られた大スクープはラヴィと大猫を排除しようと、巨大な拳を振り上げた。それはもう一つの大技、大スクープの拳が鉄槌となって飛びくるのだ。
『くらいなさい！　真実への――鉄槌！！』
噴煙の軌跡を描きながら迫りくる鉄槌へ、ラヴィは決死隊の覚悟でもって駆け出した。俺は強くなるのだと、リンシーを守るのは俺なのだと、ラヴィは気付かず声に出しながら、己の拳を固く握った。
強く強く握った拳は、誰かを守るための鉄槌へと成りえたのか。果たしてそれは不明のまま、空を切ることとなった。大猫が機兵の鉄槌を全身で覆うように、横から飛び出してきたのだ。大猫のベクトルと鉄槌のベクトルが交わり、両者はラヴィを逸れて斜め後方に飛び、爆発のような砂塵を上げて転がった。
「リンシー！！」
ラヴィは絶叫し、大猫のもとへ駆け寄った。
「おい！　大丈夫か！？」
しかし、大猫は浅い呼吸を短く繰り返すのみで、ラヴィの呼びか

けに応答しなかった。新緑の香りを放つ毛並みはボロボロに汚れ、ラヴィの体長ほどもある牙は鮮血にまみれていた。
『あらあら。自爆とはまた面妖な』
暢気な案内人の声。ラヴィは怒りに沸騰する両眼を機兵へ向けた。その機兵は、飛ばした鉄槌を新たに崩れゆく浮島から作り出し、背後にはいつの間にか数十のエイのプロペラ機を従えていた。
「負けてたまるかよ……」
そう呟いたラヴィの遥か天空で、海に半分だけ浸かっていた火山が、完全に海の中へと沈んでいた。

――　次話へつづく　――

8．戦え！合体報道機兵（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございます。
ピンチはチャンス?！　ラヴィはどうなるのか、ラストまでお付き合い願えればと思います。

次話以降もよろしくお願いいたします。

9．心の中で愛を叫び

大猫を背後に守りながら、ラヴィは機兵の鉄槌を受け止めていた。頭を庇うように前に出した両腕には機兵の連撃。がら空きの身体にはトビウオのミサイル。

正直、ラヴィは粉々に砕け散るのだと思っていた。だが、ラヴィの身体は山をも砕きそうな鉄槌を受け止めている。気を失いそうな激痛と、今まで感じたことのない衝撃はあれど、身体は持ちこたえてくれていた。

『貴方様はッ！　どうしてッ！　その猫をッ！　庇うのですかッ！？』

案内人の言葉は、その区切りごとに鉄槌を伴う。

『何ゆえにッ！　何ゆえにッ！　何ゆえにッ！』

ラヴィはいまにも途切れそうな意識を繋ぎとめ、舌を噛まないように叫ぶ。

「助けてくれたやつを！　見捨てるわけにはいかねえだろ！」

不意に攻撃が止んだ。

ラヴィは突然のことに驚いて防御体勢を崩した。

『そんなことは訊いていないッ！！』

叩きつけられた鉄槌に、半分以上の体積を失った浮島が揺れた。もろに鉄槌を受け、地面にめり込んだラヴィへトビウオが一斉に襲い掛かる。もうもうと砂塵が上がり、その中でラヴィは微動だにしない。既にこと切れた電池式人形のように力なく倒れていた。

『貴方様の想いは、その程度のものだったのですかッ！』

激情をあらわにした案内人の声。ラヴィへと再度叩きつけられた鉄槌。崩れ、濁流へ飲み込まれていく浮島。世界全てを飲み込まんと落ちてくる海。降り続く熱い潮。

巨大機兵の胸の装甲が、またしても駆動音を伴って開いた。大スクープ最大の必殺技、ストロボライツが放たれようとしていた。

『何ゆえ貴方様は、その猫を庇うのですか？』
静かな案内人の声が世界に響いた。それは最後通告であったのかも知れない。その問いに答えが返らぬ今、機兵の胸部カメラがきいいいと鳴り、ラヴィと大猫へ光の柱がつき立てられようとしていた。
『ス・ト・ロ・ボ・ラ――』
「うっるせえぇぇぇぇ！！！」
機兵の必殺技ストロボライツを止めたのは、ラヴィの怒声だった。その大声は比喩でなく機兵の胸部へ突き刺さっていた。実体化した鋭利な言葉が、機兵の胸部カメラを貫き破壊していた。
『あ、あらあら……』
「そんなもん、いちいちお前に伝える必要はねえ！　俺が伝えるべきは一人だボケ！！」
ラヴィの言葉たちは、機兵の周りを飛ぶエイのプロペラ機をも撃ち落とした。最後の『ボケ』という言葉はどうしてだかラヴィに突き刺さった。
「痛ぇ！　なんでだよ！！」
悶絶するラヴィを優しく包んでくれる何かがあった。若草の匂いのするふさふさの尻尾。大猫であった。いまだ苦しそうではあったが、穏やかな顔は、リンシーの満面の笑顔を彷彿とさせた。
暗緑色に淀んだ上空の濁流は、ゆっくりと清流に変わっていった。そして、落ちてくる海に飲み込まれ、夕日の色に染まった。
ラヴィと大猫が座っている浮島は、もはや二人分の面積ほどしかない。彼らの頭上で輝いていた極彩色の太陽は、やがてその色をオレンジへと移していった。その光は世界の全てを照らし、ラヴィと大猫の目は眩しさに細くなった。
『よき哉（かな）よき哉』
オレンジ色と海に没してゆく世界に、しわがれた声が響いた。リンシーの顔をした案内人が、なにやら赤いものを落としながらふわふわとラヴィたちへ近づいてきた。

『心が動かすのは自分自身、心を動かすのは、心が動かしたその行動じゃ。努々(ゆめゆめ)忘れるでないぞ。ふぇふぇふぇ……』
「お、お前――！！」
「にゃッ――！！」
聞き覚えのある、妙な笑い声を残し、案内人の身体は着物ごとボロボロといくつもの林檎へと変わった。
「にゃーす……」
「はぁ……そうだな、疲れたなあ」
ラヴィは大猫に背を預け、目をつむった。
しかしてオレンジ色の海が、二人を包み込んだのだった。

――　次話へつづく　――

9．心の中で愛を叫び（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございます。
次話が最終話です。

ぜひともラストまでお願いいたします。

10．エピローグ　～　二人一緒の旅

ラヴィは目を覚ました。見慣れたヒバ材の部屋の中。
お気に入りの漫画本が顔に載っていて、読みながら眠ってしまったのだとラヴィは気付いた。とてつもなく壮大な夢を見ていた気がしたけれど、それがどういったものだったのか、内容は全く思い出せない。ラヴィは少しもどかしい気持ちだったが、ただ一つ鮮明に覚えている言葉があった。

『心が動かすのは自分自身、心を動かすのは、心が動かしたその行動』

ラヴィは弾かれたように起き上がった。時刻は深夜。眠ったといっても僅かな時間だった。
「リンシー……」
行かねばならない、心はそう言っている。伝えねばならない、心はそう言っている。心は決まっている、そう心が言っている。ならば、もう迷うことなどない、ラヴィは心のままに家を飛び出した。

☆

リンシーはふて腐れたまま眠ってしまったベッドから身を起こした。手にはラヴィから借りた漫画本。すごい夢を見ていたことは覚えていたが、その内容がどうしても思い出せない。
頭をひねるリンシーを貫いた一つの言葉があった。
リンシーは猫の刺繍をあつらえた寝巻きのまま、心が命ずるまま、家を飛び出した。

☆

ラヴィは深夜の街をひた走る。リンシーの家へ向かって。
寝巻き姿の彼を酔漢たちは指を差して笑った。しかし構うことはない。リンシーはもう眠っているかも知れない。しかし構うことはない。起きていたとしても会ってくれないかも知れない。しかし構うことはない！
ラヴィは心の中で叫び、どんどん脚へ力を込めた。
いま伝えなければ後悔してしまう。リンシーは迷路の向こうへ行ってしまって、ラヴィの手は二度と届かないかも知れない。それは駄目だ。袖にされたって構わない。それだけのことをラヴィはした。だけど、何もぜず、迷路の向こうへやってしまいたくはない。
リンシーの住む地区へ伸びる坂道を登りきった時、同じように息を切らしてリンシーが走ってきた。彼女はラヴィを見つけると笑顔をみせた。いつもの笑顔だ。
ラヴィもリンシーを見つけると、自然と笑顔になり、胸がなにかでいっぱいになった。
「リンシー！」
「ラヴィ！」
ラヴィの栗色の癖毛がはねる。リンシーの滑らかな赤毛がなびく。もはや二人には言葉など不要であった。
「遅いわッ！！」
「あッ――りがとうございまぁす！！」
リンシーの飛び蹴りがラヴィの肩に決まり、見事な軌跡を描いてラヴィはすっ飛んだ。
自分が転がり起こす砂埃の向こうに、ラヴィはリンシーの笑顔を見た。
「あぁ……」
言わなければならない、心がそう言っている。言葉なんてものは、伝わりにくくて面倒で、口にしたとたん恥ずかしくて価値が落ちる。だけど伝えなくてはならない言葉がある。

「リンシー、遅くなってゴメン。俺も大好きだよ」
砂埃が晴れ、月明かりに照らされたリンシーは、その髪の毛みたいに真っ赤になって笑った。満面の笑顔。ラヴィの大好きな笑顔。
「うん、許す！」
今度こそ、二人に特別な言葉など必要なくなった。
二人それぞれ、自分を見つめる旅に出た。一人だったけど、一緒だった。めいいっぱい足掻いたラビリンスの向こうには、お互いを待っている人がいた。そんな、たった一夜の二人の一人旅。

おやすみ。

さてさてこの後、驚くべき効果を発揮する『知恵の実』を巡って各国が暗躍するのだが、それはまた別の話。

――了――

１０．エピローグ　～　二人一緒の旅（後書き）

最終話までお付き合いくださった皆様、本当にありがとうございました。

気付いていた方はいらっしゃいますでしょうか？
実は二人の名前、ラヴィとリンシーは、ラビリンスを割ってもじったのです。

よろしければ、お気軽に感想などをいただければ幸せです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3954v/

二人の一人旅

2011年9月6日03時28分発行